

古典的 CASE 18.

David H.G. Aet. 45. Dark.

1893 年 5 月 15 日－窒息している牛の喉からじゃがいもを抜き出す際、牛が口を閉じたために彼の左手は牛の臼歯によって潰された。

その時はひどい苦痛はなかったものの、しかし、責めさいなむ苦痛が夜になって始まり、言い表せないほどの苦痛のために、彼は三昼夜全く眠ることができなかった。彼は温水、湿布剤など様々な応急処置を施し、そしてアヘン剤の鎮痛薬を大量に摂ったが緩和されなかった。苦痛の緩和のために、20 マイルの距離を材木ワゴンに乗って彼が私のもとに訪れた時には以下の症状があった。

吊り包帯で保護した手を右手で慎重に運ぶ。

牛の歯に噛まれた手の甲は、赤く腫れあがり、どちらかといえば暗い色で浮腫状である。腫れは腕のほうまで広がっていた。

非常に柔らかく敏感；痛みは動き始める時が特にひどかった。夜間に悪化する。

歩き回ることによって楽になり、より耐えられる。

せっかちな；迅速な緩和を求める。

落ち着かない；動き回りたい気分。彼は過去三昼夜フロアを歩き回っていて、その結果、疲れきっていた。夜に悪化。

RX のCM(F)を水に溶かし、良くなるまで 30 分ごとにひとさじ。

午後 10:00 に薬を摂り始め、一回目の摂取後良くなったように感じたが、彼の妻は二回目の投与のために彼を起こし、その後一度も目を覚ますことなく一晩中眠り続けた。翌朝、痛みから完全に解放されて目覚めた。手は強く触るとほんの少しだけ痛んだが、しかし彼は腕を下げて階段を降り、腕を慎重に揺らして見せると明るくニコニコ笑い(特に私のために)、そしてそれを生温い湯で洗った。腫れは急速に消失した。24 時間以内には彼は牛を輪縄で捕まえるために手を使っていた。治癒は迅速で永続的であった。